

「国語Ⅰ」の実践的研究

世 羅 博 昭

——「総合化」をめざして——

一 はじめに

来年度から、新学習指導要領に基づく「国語Ⅰ」が、全国の高校で一斉に実施される。これに先立って、本校の国語科（八名）では、過去三年間、新しい「国語Ⅰ」のあり方を求めて、実践的研究を進めてきた。その概略を報告するとともに、今の段階で明らかになった点を提示したい。

二 私たちの基本的立場

- ① 「国語Ⅰ」という科目の性格を、私たちは次のように整理した。
 - ② 従前の「現代国語」と古典に関する科目の基本的な内容を整理して構成された総合的な科目である。
 - ③ 「表現」、「理解」と「言語事項」との、二領域一事項から構成される科目である。
 - ④ 中学校国語との関連を密接にしながら、その内容を更に発展させた科目である。
 - ⑤ 原則として第一学年において全員に履修させるものであり、選択科目「国語Ⅱ」・「国語表現」・「現代文」・「古典」の学習の基礎となる科目である。
- この「国語Ⅰ」に対して、とくに、「現代国語」と「古典」とを

「総合化」することに対して、賛否両論がある。「総合化」に賛意を示す考え方としては、

国語を「現代国語」と古典に関する科目に分けて履修する方式は、従来長く行われて相当の成果をあげてきたが、本来両者は、連続した言語文化として把握されるべき一面を持っており、両者を別個に学習すると、その共通性、連続性の一面が見失われるおそれがある。殊に古典を学ぶ初歩の段階では、連続性を保った形で学習する方が自然で無理なく学習でき、また総合的に扱う方が両者の学習量や進度を適宜調整できるという利点もある。

（文部省「高等学校学習指導要領解説 国語編」9ページ）
がある。これに対して、否定的な意見としては、

- ① 昭和三一年度改訂の「国語甲」（必修の総合国語）の失敗をくり返すのではないか。
 - ② 「現代国語」が定着し、その研究成果もあがっているのに、どうして再び元にもどす必要があるのか。
 - ③ 総合国語では、組織的・体系的な指導ができず、非能率的な指導を展開することになるのではないか。
- などが、主なものである。

本校国語科としては、新しい「国語Ⅰ」にさまざまな問題点があ

ることを確認した上で、改訂の趣旨にのっとり、「現代文」・「古文」・「漢文」を総合的に学習させる立場をとることにした。

「現代文」・「古文」・「漢文」を総合化する手法としては、次の三つの型が考えられる。実際に発行された「国語I」の教科書をみて、基本的にこの三つに分類することができる。

A型……現代文編／古文編／漢文編／…… (1)

B型……現代文／古文／現代文／漢文／…… (15)

C型……現代文・古文・漢文／現代文・古文・漢文／…… (1)

(括弧内の数字は、それぞれの型に該当する教科書数を示す。)
A型とB型とは、それぞれ「現代文」・「古文」・「漢文」の学習を通して、結果としてこの三者の「総合化」をはかろうとするもので、極論すれば、現行の学習指導要領に基づいた指導の場合と基本的にあまり変わらぬものになるといえよう。それでは、改訂の趣旨にふさわしくない。そこで、私たちは、改訂の趣旨に最も合う「C型」すなわち、単元ごとに「現代文」・「古文」・「漢文」の三つを総合化する方法をとることに決めた。そして、どこまでこの一単元の中に「現代文」・「古文」・「漢文」を総合化する方法が有効性を持つかを実践的に明らかにしようとした。

次の問題は、何を軸に、一つ単元の中に「現代文」・「古文」・「漢文」を総合化するか、である。軸としては、「主題」・「ジャンル」・「技能」などが考えられ、したがって、「主題単元」・「ジャンル単元」・「技能単元」などを組み合わせることができるが、次のような仮説のもとに「主題」による単元を組み合わせることとした。

① 一つの主題で単元を組み、一貫した学習を展開した方が、生

徒を意欲的に学習させやすいのではないか。

② 一つ主題のもとで、「現代文」・「古文」・「漢文」をそれぞれ読み比べれば、それぞれを別々に読むばかりよりも、生徒の思考・認識の拡充・深化をはかることができるのではないか。

なお、「主題」による単元を組み合わせるのであるから、必然的に理解領域中心の単元を組み合わせることになる。

以上をまとめると、私たちの「国語I」実践的研究のねらいは、「理解領域において、それぞれの主題ごとに、『現代文』・『古文』・『漢文』の三つを総合化して、言語文化の共通性、連続性を保った形の学習をおこなう。」「方法がどこまで有効性を持ちうるかを明らかにするところにある。

三 三年間の実践的研究の概略

右に述べたような基本的立場に立って、昭和五四年度から三年間、「国語I」の実践的研究を進めてきた。各年度ごとに、実践的研究の概略を報告したい。

(1) 54年度の試み——単元「自然」の場合——

第一年度は、まず主題単元としてどのようなものが考えられるかを検討した。現行および過去の教科書の中の「主題のたて方」を調査整理し、検討した結果、「自然・愛・旅・自我・社会とひと・歴史・戦争と人間」ことは「芸術・文化」と、十の主題を設定した。

次に、第一年度は、単元「自然」を取り上げて実践することに決定し、どのような角度から「自然」に切り込むかの検討に入った。

単元「自然」の内容を、人間と自然との関係において、(A)自然の神

秘 (B)自然との一体感 (C)自然への畏怖 (D)自然の征服 (E)自然の

破壊の五つに分析した上で、四つの班に分かれて、教材の選択、単元の構成をはかり、実践した。

①「自然への回帰」(古文随筆、漢文詩)

②「自然と人間の諸相」(現代文小説・随想・評論、古文物語・和歌、漢文詩)

③「自然の断絶」(現代文評論、古文随筆・和歌・日記)

④「日本人の自然観とその課題」(現代文評論、古文和歌・随筆・俳句)

⑤の指導は一人で担当したが、それ以外はすべて二人で担当した。

詳しくは、「国語Ⅰ」の実践的研究(1)——單元「自然」の場合——(「国語科研究紀要」第十一号)を参照されたい。

(2) 55年度の試み——單元「愛」の場合——

第二年次は、單元「愛」を取り上げて実践することにした。この場合も、「愛」の内容を、愛の対象が何かで分析したり、どのような状況における愛かで分析したりした上で、四つの実践をおこなった。

①「愛——出会いと別離と——」(現代文詩、古文物語、漢文詩)

②「私の考える愛のすがた」(現代文評論、漢文思想)

③「愛——戦いの庭で——」(現代文短歌・評論・小説、古文物語)

④「状況と愛の姿」(現代文小説、古文物語)

⑤の指導は二人で担当したが、それ以外はすべて一人で担当した。

詳しくは、「国語Ⅰ」の実践的研究(2)——單元「愛」の場合——(「国語科研究紀要」第十二号)を参照されたい。

(3) 56年度の試み——八つの單元を中心に——

第三年次は、「自然」「愛」以外の八つの主題單元をそれぞれが分担して單元計画をたて、それを全員で検討していった。

①單元「旅——旅のころ——」(現代文紀行文・評論、古文紀行文、漢文詩)

②單元「自我——少女たちの心——」(現代文小説、古文物語)

③單元「歴史——時代に生きる人々——」(現代文小説・伝説、古文物語、漢文史話)

④單元「戦争と人間——庶民の課題——」(現代文詩・小説・評論、古文物語)

⑤單元「社会とひと」(現代文小説・評論、古文物語、漢文思想)

⑥單元「ことば」(現代文評論・小説、古文随筆、漢文詩・逸話)

⑦單元「芸術——制作と享受——」(現代文評論・小説、古文詩話)

⑧單元「文化——年中行事——」(現代文評論、古文随筆、漢文詩・歳時記)

⑨⑩⑪⑫の單元は、実際に授業をおこなった。③の指導は二人で担当したが、あとは一人で担当した。①④⑤⑥の場合

は、單元計画の細案はたてたが、授業はおこなわなかった。それぞれの実践例を紹介すればよいのだが、紙面のゆとりがないので、單元「歴史——時代に生きる人々——」の單元計画を紹介するにとどめる。この時間配当十五時間で実践をした。

指 導 計 画						単元名		
単元のまとめ △四つの作品を読み終えて√	4	3	2	1		次	歴 史 時代に生きる人々	
	「私の祖父」 (宮本常一)	「長刀はむかしの鞘」 (井原西鶴)	「臥薪嘗胆」 (曾 先之)	「無名の人」 (司馬遼太郎)	単元設定の説明	教 材		
	理 解	理 解	理 解	理 解	領	単元設定の		
	現代文	古 文	漢 文	現代文	域	題 旨		
伝 記	物 語	史 話	小 説	時間	歴史は人間によって作られ、人間は歴史の中で生きている。自分もその一人である。自分の生き方を充実させ、幸福な生活を送るために、過去の歴史・個人の歴史に学ぶことの意義の深さを理解させる。			
1.5	3.5	4	3	0.5	学 習 目 標 (内 容)	学 習 目 標 (技 能)	指 導 者	
四つの作品を読み終えて、感じ、考えたことを書く。	江戸末期から昭和初期にかけて生きた、農夫宮本市五郎の生涯を読み、「そのまま民話と言っているような人」となりをとらえる。	元禄時代を生きた最下層の町人の大晦日の越し方を読みとることによって、社会の底辺を必死で生きる人間の生き方を探る。	春秋時代の末期、三十余年にわたる呉越抗争の中で、国王としての夫差・句踐がどのようによって生きたかを読みとることによって、歴史を動かす力に気づく。	幕末動乱期に生きた、無名の志士・医師である所郁太郎の生き方を通して、「人を救うために人の世で生きる」ことの意義を読みとる。		効果的な表現を理解する。 中心文をとらえる。	訓読のきまりに従って読む。 場面の展開に注意して読む。	長谷川
内容をもとめる。 各自の視点・立場を見定める。	語句の意味・語感をとらえる。 文章の組立て・筋道をとらえる。	人物の生活状況をとらえる。 作者の視点・立場を見定める。			長谷川			出典
長谷川	長谷川	世 羅	長谷川	長谷川	長谷川			教科書
	教科書	「世間胸算用」 卷一の二 (傍注資料プリント)	「十八史略」 卷一 (傍注資料プリント)	教科書 (中学二年)		対象		
						時間	15	
						学年		1

四 明らかにになったこと——成果と課題——

「総合化」について、学習者は次のような感想を記している。

△長所▽

- A 高校に入ってから急に「古文」という難しそうな科目ができて、どうしようかと思っていたので、今までとあまり変わらぬ授業の中で自然に「古文」に触れることができてよかった。(女)
- B 一つことがらについて深く掘り下げられてよい。古文と現代文との差というものをあまり感じなくなり、古文に対して抵抗感を持たなくなってくるようだ。国語とは日本人が長い年月を経て築き上げてきた感覚を学びとるものだと思うから、このやり方はとてもよいと思う。(男)
- C 「自我」のテーマで現・古・同時にやるというのは、古文にも興味がわき、また、おもしろく？ 授業も進められたし、今までと違って、充実感があつた。(男)
- D テーマを広い範囲から考えられる。いろいろなことがらを比較できる。従って、内容を深く追求することができる。(男)
- E 国語という科目は教科書を忠実に勉強していくばかりではなくて、いろいろな生き方・考え方を深く学習して、私たちがそれを養っていく科目だと思う。だから一つのことについて深く学習していくやり方は、よかった。(男)
- F 現代文、古文を組み合わせることによって授業に変化があつてよい。(女)
- G 授業時間がとびとびにならない。(男)

△短所▽

H 文法などの学習面の能率的な学習ができない。(男)

I 現国なら現国、古文なら古文の、それぞれ特有のものをつまみにくいということで、古文の文法なども、あまり深く理解できなくなるのではと思った。(男)

J きらいな主題単元の間じゅう授業がおもしろくなくなることもある。(女)

K やはり何時間も同じテーマだと飽きがくる。二作品くらいをとりあげるのがよい。(女)

L 古文と現国を一緒にすると、両方がこんがらがってきわからなくなる。(男)

M 変わりが少し調整が悪いと失敗するかもしれない。(女)
(単元「自我」学習後に書かせた感想より)

これらの感想をもふまえながら、三年間に及ぶ「国語I」の実践的研究を通して明らかにになったことを、簡条書きにしたい。

(1) まず、総括的に、主題単元による「総合化」の意義ある点を、二点あげたい。

① 感想A・B・Cにみられるように、一つの主題のもとに、「現代文」・「古文」・「漢文」を合わせて学習する方法は、古文・漢文を読む興味と関心を高めるのに有効であるとともに、「現代文」・「古文」・「漢文」それぞれの学習の意義を白覚させるのに役立つ。

② また、感想D・Eにみられるように、学習者の思考・認識の拡充・深化をはかるのにも有効である。具体的に言えば、同一主題のもとで「古文」・「現代文」を読んだ場合には、歴史的視

点に立って両者を比較して読めるので、日本文化、あるいは日本人のものの見方・感じ方の連続性（不易性）と非連続性（流变性）とを明らかにすることができる。したがって、この学習をおこなえば、現在という時間に生きる自己の位置を把握することができると同時に、日本文化創造の不在の手として今後のあり方についても思いをめぐらすことが可能である。また、「古文」・「漢文」・「現代文」の三つを読んだ場合には、「古文」・「現代文」の二つを読んだ場合に比べて、さらに「漢文」が加わるので、日本と中国との比較もでき、幅広い視野からその主題について考えを深めることができる。

(2) 主題の設定

④ 十の主題を設定してそれぞれの単元を組んで実践をおこなったが、設定した十の主題そのものの検討も今一度しておく必要がある。たとえば、このたびの実践では単元「自然」で一部と入り入れたが、現代を生きる学習者にとって、「現代文明」や「自然科学」などについても考えさせる必要がある。その場合、どのような主題を設定して「古文」・「現代文」などを合わせた単元を組むことができるか、検討を加えたい。

⑤ 大きな主題が決まっても、その主題に対してどのような角度から切り込むか、その切り込み方が主題による単元学習の成否の鍵を握る。たとえば、単元「自然」の場合、「自然」に対してどのような角度から切り込むか。私どもは、「自然」の内容を、自然と人間との関係において、(A)自然の神秘 (B)自然との一体感 (C)自然への畏怖 (D)自然の征服 (E)自然の破壊 の五

つに分析した上で、小主題を決定した。「自然と人間の諸相」という単元を組んで、(B)(C)などさまざまな人間と自然とのかわり方を明らかにしていく実践や、「自然への回帰」という単元を組んで、(B)の立場を中心において、現実の社会で生活に疲れた人間が自然の中に身を置き、自然と一体化する中で生きる力を得ようとする姿を見つめさせる実践などをおこなった。同じ「自然」という単元でも、どのような角度から切り込むかによって、学習者にとってやりがいのある単元になるかどうかが決まる。

⑥ 主題の決定にあたっては、学習者の発達段階や、興味・関心を考慮に入れる必要がある。主題は指導者が選定するものであるが、学習者の胸の中や学習活動の中で生きる主題を見いだしたい。そうすれば、感想などは生まれてこない。

(3) 教材の選定

⑦ 主題によっては、「古文」・「漢文」・「現代文」すべての教材を探してくるのに困難な場合がある。「自然への回帰」という単元の場合には、「現代文」に適當な教材が見つからず「古文」と「漢文」で単元を編成した。また、単元「自我——少女たちの心——」の場合は、「漢文」に適當な教材が見えず、「古文」と「現代文」だけで単元を組んだ。

⑧ 教材の選定にあたっては、全単元を見通して一つのジャンルをも欠落しないように、ジャンルへの配慮が必要である。また、学習者に教材を選ばせることも今後考えていきたい。

⑨ 教材の選定にあたっては、学習者の興味・関心はもとより、

(4)

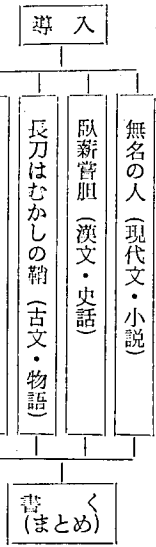
発達段階や学力の実態に即した教材の内容(質)と量を考える必要がある。指導者はついつい力んでしまつて、難解な教材をとりあげたり、量を欲ばつたりしてしまう。感想Kにもあるように、あまり取り上げる教材を多くしないこと、言いかえれば長時間にわたる単元を組まないことである。

教材の配列

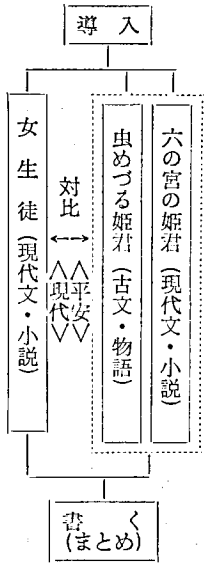
⑧ 教材の配列にあたっては、学習者の思考・認識の拡充・深化をはかるのに有効な構造化をはかることが大切である。教材の配列の型としては、次の二つがある。

(A)並列型……同一テーマの教材を配列する。

(例1) 単元「歴史——時代に生きる人々——」の場合

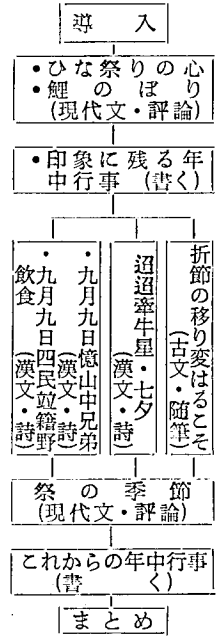


(例2) 単元「自我——少女たちの心——」の場合



(B)重層型……対立的内容の教材や発展教材などを重層的に配列する。

(例3) 単元「文化——年中行事——」の場合



並列型は思考・認識の拡充をはかるのに有効であるが、その深化をはかる点では劣る。重層型は、思考・認識の拡充のみならず深化をはかることにも有効である。ただ、一単元が膨らむことに注意する必要がある。

⑨ 教材の配列にあたっては、中核教材・発展教材など、その単元内における教材の位置づけを明確にする必要がある。また、学習者の思考・認識の深化をはかるために「評論」教材は有効である。その用い方を工夫したい。

(5) 指導のあり方

⑩ 「国語I」の担当のし方として、この三年間、二人で担当する場合と一人で担当する場合とを実践してきたが、「総合化」の立場からすると、一人で担当するのがよいと言つてよからう。一人で担当する場合は、たしかに教材集めや教材研究などつらい点はあるが、一貫した指導や学習者の実態に応じて臨機応変

の対応もとれる。二人で担当する場合でも、二人の連携が十分に取れば、教材集めや教材研究も徹底できるし、相互に啓発し合えて、二人担当制も悪くはないが、実際に二人がお互いの授業内容をもつかんで総合化をはかっていくのは容易なことではない。

⑪ 学習者の学習意欲を高め、思考・認識の拡充・深化をはかるためには、次のような点に注意して指導過程を組むことが大切である。

⑦ はじめに単元設定の理由や学習目標（指導目標ではない）、授業の構想を学習者に周知徹底すること。

① 常に単元全体を見通しながら、今、何のために何をしているのかを学習者に自覚化させておくこと。

② 常に前段階でとりあげた教材との関連をはかり、総合化の意識を喚起すること。

④ 指導の途中で学習者の書いた感想文を教材として用いたり、話し合い学習をとり入れたりとよい。

③ 同一の教材による基本的な学習が終わった後に、発展学習として、学習者一人ひとりが個別的に、自分の抱いた問題点の解決のために自ら本を選んで読んでいくという学習を設定することもとり入れていきたい。

⑫ 主題による「総合化」をはかる学習は、学習者の問題意識を高め、「古典」と「現代国語」との連続性をはかることができるといふ利点はあるが、さきあげた学習者の感想G・Hにもその一端があるように、主題による単元学習はとかく内容把握

に中心がいき、言語技能を育てる指導が不十分になりがちである。その克服のためには、高等学校三年間の国語科教育を見通した能力一覧表を作成し、それぞれの単元、あるいは教材の学習で身につけるべき「能力」を明確にして指導をしていきたい。

⑬ 古典の指導については、根本的に検討する必要がある。

⑦ 「国語I」における古典指導を、まず、中学校三年間、高二「国語II」、高三「古典」という前後の見通しの中で位置づけることが大切である。

① 「国語I」における古典指導を「生徒に古典への関心を芽生えさせ、現代生活の中で古典を読むことの意味を考え気づかせていく学習指導」（大平浩哉氏「改訂高等学校学習指導要領の展開 国語科編」87ページ）だとするならば、高校一年の段階では、あまり口語訳や文法にこだわらず、古典を文学として読み味わう指導をしていくのが望ましい。

② そのためには、単元主題とも関連するが、学習者の心情にマッチした教材、学習者の日常性に衝撃を与える教材や、なんらかの知的興味をもたらす教材を用意することが大切である。

④ 資料作りには、今まで以上に言語抵抗をとり除く工夫が必要である。このたびの実践の中でも、口語訳つき、原文に傍注をつけた資料や書き下し文の活用など、さまざまな工夫をした。また、「学習の手引き」や「ワークシート」などを準備して、学習のし方を示してやることも工夫したい。

④ 音読・朗読を重視したり、視聴覚教材を取り入れたらして、

授業に変化をつけた楽しい古典の学習を工夫したい。

(6) 理解と表現との関連

⑬ 理解と表現との関連的指導としては、次の二つの型の実践ができた。

(A) 理解の拡充・深化をはかるために書かせる指導

ほとんどすべての実践がこれである。書かせる場としては、単元の途中と終わりの二つが考えられる。実践のほとんどは、単元の終わりに「まとめ」として書かせているが、単元の途中で書かせて、それを教材として用いるような実践をもっと開拓していく必要がある。

(B) 表現のための内容を育てることをねらった理解の指導

単元「愛——私の考える愛のすがた——」の場合が、この立場をとる。「私の考える愛のすがた」を書くことを目標にし、そのために「漢文」・「現代文」を認ませて、書く内容を育てる指導をしたものである。この場合の指導過程は、次のようになる。

I 書く……課題(テーマ)についての自分の考えを書く。

書くことによつて自分の感想・意見を自覚化し、自己の課題・問題意識を持つ。

II 読む……作品(文章)を読み、多様な考えを知る。

視野の拡大をはかる。他の人の感想・意見を知ることをも含めてよい。

III 書く……課題(テーマ)についての自分の考えを書く。

⑭ 表現と理解の関連指導は、主題による単元学習の中では困難である。そのための独立単元を組むことが必要である。

(7) 評価のあり方

⑮ 一つの主題のもとに「現代文」・「古文」・「漢文」の三つを「総合化」して、学習者の思考・認識の拡充・深化をはかるとともに、言語技能を育てる指導をしてきた。「現代文」・「古文」・「漢文」それぞれの言語技能がどこまで身についたかを評価することは従来どおり可能であるが、学習者の思考・認識の

拡充・深化を評価するのはなかなかむずかしい。今のところ、授業中の発言内容や、事前・事後の感想文によって評価するやり方しか、とっていない。今後、さらに検討を加えていきたい。

五 おわりに

三年間に及ぶ「国語 I」の実践的研究の概略を紹介し、さまざまな成果と課題を明らかにしてきたが、今、これらの成果と課題をふまえて、来年度から実施に入る「国語 I」の年間指導計画の作成に入っている。今のところでは、来年度の単元構成の型として、今までどおりすべての単元を「主題単元」で通す型と、新たに、「主題単元」を組むほかに、その「主題単元」の学習を成り立たせる基本としての「学習の仕方」や「技能(スキル)」を育てる「基礎単元」を前に置く型との、二本立てをとることを検討している。

これ以外のさまざまな課題を克服して、学習者一人ひとりが意欲的に学習できるようにするとともに、学習者一人ひとりに「国語 I」のめざす学力を身につけさせていきたい。

(広島大学附属高等学校教諭)